

2019. 7. 4

畑 啓之

江戸時代にサケの習性を知り、それを利用して漁獲高を向上させた人がいた

サケの習性を理解している私たちは、サケが遡上する環境を整えることがサケの漁獲高を増やす上で最善の方法であることを知っているが、江戸時代においてこの習性を知り、苦難の末に環境を整え、村上藩（現在の新潟県）をサケの一大産地とした人がいたことは驚きであり、その実現のために向けられたエネルギーは称賛に値する。

記事によると「乱獲により 1720 年ごろには漁獲量が限りなくゼロに近づいていた」。これを克服しサケの漁獲量を向上させるために、「市内を流れる三面川を3方向に分流させ、その内の一本でサケを囲い込み養育地とする」。当時としては画期的なアイデアであり、そのための河川分流水工事を 25 年の歳月をかけてやり遂げた。

サケ漁の歴史（Web）によると、

5.江戸時代のサケ漁

本朝式（延喜式）や刊行物にみられるサケ漁

サケ漁はもっぱら河口、河川で行われていました。川に遡上するサケが漁獲の対象でした。サケの漁は、サケが遡上する北海道・東北・北陸地方を中心に、日本海側では山口県粟野川（あわのがわ）、太平洋側では千葉県利根川（とねがわ）を南限として行われていました。漁場は河口部、河川、河川上流の産卵場など、サケの習性を利用して行われてきました。

とあります。

今でこそ人工受精卵より孵化させた稚魚の河川への放流が主となっています。サケ（Wikipedia）には、

日本近海のサケの圧倒的多数は、安定した漁業資源確保のために北海道・東北地方を中心に人工的に採卵・放流される孵化場産シロザケが占めている。稚魚の放流が行われず、自然産卵のみのサイクルが維持されている河川も北海道、北陸・近畿・山陰地方にいくつか存在する。

江戸時代のこの自然の摂理を利用したサケ資源の増産方法には、現代人も見習う必要があると感じました。

文化

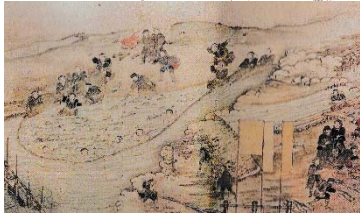
新潟から北東に約600キロの位置にある村上市は全国でも屈指のサケの産地で、市内にはサケの生態や歴史に関する資料を展示する「イヨボヤ会館」がある。「イヨボヤ」は村上の方言で「サケ」の意味だ。この地でサケの養育が盛んになったのは、村上藩士・青砥武平治(1713~88年)の功績が大きい。私は館長としてサケや武平治のことを調べている。

この武平治、地元でも近年まではあまり知られてはなかった。なぜなら、彼に関する記録や資料が少なかったからだ。しかし、1996年に関連する文庫が発見され、武平治がサケの養育に寄与したことが改めて裏付けられた。

私は公益財団法人の「イヨボヤの里」で勤務し、08年に財団が運営するイヨボヤ会館の館長に就いた。私自身は漁師でも研究者でもないが、会館で仕事をすすめるうちにサケの奥深さにはまっていた。そして、村上のサケ文化を多くの人に伝えたいと

藩士が守ったサケ文化

◇日本有数の産地 新潟・村上で歴史たどる◇ 奥村 芳人



青砥武平治が考案した自然ふ化の手法でサケを捕る村上の人々(部分、19世紀初頭、イヨボヤ会館所蔵)



いと思うようになった。武平治は40代後半までは無名の一藩士だった。しかし、「郷村役」という名村の領業などを統括する役目を任せられ、その人生は一変する。村上は平安時代以来のサケの産地だったが、乱獲によって1720年ごろには漁獲量が限りなくゼロに近づいていったからだ。

当時はサケの保護増殖という考えはなく、漁師は野放図に捕まえていた。その結果サケ産量がつかれば、藩の財政にも大きな影響がある。捕り尽くすのでなく、安定的に漁獲量を確保すべきだと考えた武平治が奮起したのが、サケが産卵のために産まれた川に帰ってくる「田川回帰」の習性だった。

具体的には、市内を流れる「田川」を3方向に分流させる。サケは3つの支流のそれぞれを遡上してくるが、そのうちの1本でサケを囲い込み「種川」という養育池を造成する案だった。今でもサケの回帰性は多くの人

があたりまえのように理解しているが、この時代にそこに気づいたのが武平治の慧眼だった。

河川工事は1763年に始まった。大型の重機や建機がない時代なので相当の難事業であり、試行錯誤しながら工事を進めた。武平治はこの事業の間もサケの生態や特徴を研究し続けた。しかし、事業が始まって25年後の88年、武平治は事業の完成を見ることなく世を去った。享年76。本人が最も悔しかったに違いない。だが、彼の遺志を受け継ぐ人々が94年、種川を完成させた。

この方式は「自然ふ化増殖」と呼ばれ、明治時代に人工ふ化が導入されるまで100年以上にわたって日本で主流の方式だった。村上にはサケの大産地として知られるようになった。全国各地から視察が相次いだ。

村上では現在でも建物の軒先にサケを丸ごと干す「塩引き鮭」を作る光景が見られるが、こうした伝統料理が今まで続いているのも、武平治ら先人たちの努力があったから

だ。イヨボヤ会館には、武平治が考案した種川でサケを捕る人々の姿を描いた絵や資料も残る。隣接する鮭公園には武平治の銅像もあり、私が市内の小中学生らに彼の功績を話す機会も多くなった。

6月18日夜、村上市は最大震度6強という地震に見舞われた。幸いイヨボヤ会館や私を含めた職員は無事だったが、大きな被害を受けた方や建物も少なくない。本格的な復興はこれから動き始めるところだが、ぜひ一度現地でも村上のサケ文化を感じてもらいたい。(おこむら・よしと)イヨボヤ会館館長